

校名：埼玉大学教育学部附属小学校

所在地：〒330-0061

電話番号：048-833-6291

埼玉県さいたま市浦和区常盤6-9-44

記載日：平成28年6月18日

記載者：齋藤博伸

記載者役職：副校長

貴校の校風、おおまかな特色について

児童数658名、学級数18学級、教職員数50名の学校である。

本校は、さいたま市浦和区の中央に位置している。徒歩5分圏内には、市役所や警察署、消防署、テレビ局等があり、市街の中枢である。また、大通り（国道17号線）沿い以外は、閑静な住宅街であり、落ち着いた環境が広がっている。

公立学校と同様、初等普通教育を行う小学校であるとともに、埼玉大学教育学部の附属小学校として、次の3点の特色ある性格をもつ教育施設である。①教育実習学校としての性格②研究、実践校としての性格③地域の学校教育へ協力する性格。学校教育目標は、「勤労をいとわない自主的精神の旺盛な、人間性豊かなよき社会人を育成する」である。さらに、児童へは、重点目標「かしこく、あかるく、なかよく、たくましく」を掲げ、指導にあたっている。全校児童が重点目標について関心・意欲が高まるように、日々の声かけを行っている。具体策の一つとして、生徒指導主任が中心となり、児童のよい態度や望ましい行動を写真に撮り掲示物や電子黒板のスライドショーにして評価している。

また、地域とともにある学校として、図画工作の授業で作成した作品を体育館や多目的ホールに展示し一般公開したり、近隣の小学校とバスケットボール大会やサッカー大会を開催したりしている。

特に、保護者の学校教育への深い理解があり、年度当初の学校説明会、学年・学級保護者会、授業参観等でほぼ全家庭が出席している。そのため、学校教育目標の具現化に向けて、学校・家庭・地域が一体となって日々の教育活動を行っている。

貴校の卒業生の活躍状況について：

追跡はしていない。

貴校勤務経験者の先生方が公立学校・教育委員会などへ戻られた後の活躍状況について：

- ・県・市町村教育委員会指導主事や管理職として活躍している。
- ・各教科を専門的に研究し、実践を基にした研修会を開催し、若手・ミドル教員の教員としての資質を高めている。
- ・定年退職後は、大学教員や再任用教員として、埼玉県の教育が質的に向上するように活躍している。
- ・附属小学校の研究について、指導助言を行っている。

魅力のある、特色のある、または、今後、公立学校へも展開できそうな先導的な取り組みなどについて

◇6年間の子供の育ちと学びを充実させる教育課程の編成

①異学年交流を計画的に実施

本校では、年度当初から学年末の1年間に異学年交流の時間を設けている。段階的に関わりを深められる取組を計画・実施している。この異学年交流の集団を本校では「なかよし班」という。

5月初めに1年生から6年生が30名程度のグループを編成し、隔週金曜日の業前時間で、なかよし班でレク活動を行っている。

5月～6月にかけて5日間ほど、給食を一緒に食べる「なかよし給食」をしている。大学の先生や他学級担任の教員となかよし班で一緒に食べている。

9月から運動会応援合戦に向けて、最高学年がリーダーとなって、応援の練習をしている。

10月～11月にかけて1ヶ月ほど、清掃活動を一緒に行う「なかよし清掃」をしている。なかよし班の上級生が掃除の仕方を教えることで、下級生の掃除が上手になっている。

11月に全校児童徒歩遠足をなかよし班で行っている。片道1時間半の道のりを仲良く関わりを深めながら歩いている。

1月になかよし班対抗の長なわ大会を行っている。12月から練習をなかよし班ごとに行い、技能向上とともに、仲間を思いやる心を育てている。

3月になかよし班ごとのお別れ会を実施している。1年間の活動を振り返ったり、お世話になった上級生に感謝の気持ちを表したりしている。

②学級対抗スポーツ大会を計画的に実施

本校では、バスケットボール大会、水泳大会、運動会、サッカー大会を学級対抗で実施している。勝つ喜びや負ける悔しさを味わったりするだけでなく、スポーツ大会までの取組を充実させることで、一人一人の技能・体力向上や学級の団結力を高めている。例えば、水泳大会は9月初めに実施するが、夏季休業中の水泳実習（参加は希望者のみで13日間程度実施）では、1日平均約300人（本校児童の半数）が参加している。

③「学びの本質」を育む授業の創造（5年次）

各教科指導の内容やその教科特有の資質・能力を縦の系とし、教科横断的・汎用的な資質・能力を横の系として研究を進め、授業実践をしている。各教科研究分野を発揮しながらも、本校として、どのような子供を6年間で育てていくのかを明確にし、共通理解・共通指導している。特に、思考力・判断力・表現力の育成を充実させるために、指導法改善部会を組織している。

④PTAと連携した教育環境の充実

- ・登校時・下校時・夏休みの水泳学習時における校舎内外を保護者が見回することで安全を確保している。
- ・毎月一回、登校時に通学路における安全を確認し、厚生安全部だよりを発行し、全保護者に安全に対する意識を高めている。
- ・運動会や研究協議会など、多数の来校者があるときには、保護者が受付・案内等をしている。
- ・本校の学校課題でもある投力低下の改善に向けて、保護者がストラックアウトを制作・メンテナンスをしている。

地域において、現在、貴校はどのような存在であると考えますか：

本校は、一般の公立小学校と同様、初等普通教育を行う小学校であるとともに、大学教育学部の附属学校として、次のような特色ある性格をもつ教育施設である。

(1) 教育実習学校としての性格

教育学部の学生が教育実習生として来校し、小学校の教師として必要な資質を身に付けるため、参観や実習を行う。したがって実習期間中（1学期4週間、2学期4週間、3学期2週間計10週間）児童は、実習生の指導を受けることが多い。

○教育学部教育実習委員会と連携をし、来年度から教育実習事前指導に使用するDVDの撮影を行った。具体的には、校長・副校長の講話、登校指導、給食指導、清掃指導、休み時間、授業準備、研究授業、研究授業後の反省会、運動会などである。

○学生の研究協議会参加人数が昨年度より11名増加し181名であった。平成24年度は、学生の研究協議会参加人数は73名だったので、3年間で約2.5倍増えている。

○平成28年6月3日（金）に、本校にて基礎実習を行う。300名の学生が参加をした。

○教科ごとに連携をし、学生の授業参観や児童への指導補助を行っている。（例：国語教育分野、音楽教育分野、理科教育分野、美術教育分野、心理・教育実践学講座、学校保健学講座など）

○教育学部実践総合センターと連携をし、フィールドスタディAとして、年間を通して学生を6名受け入れている。

○埼玉大学教職大学院の学生を1名受け入れている。

(2) 研究、実験学校としての性格

教育上のさまざまな研究や実験をする学校である。したがって、教育研究の必要上、いろいろな学習指導法が実験されたり、調査研究が進められたりする。このため、保護者に協力を要請する面が多い。

○研究協議会ICT活用公開授業 26授業者全員ICT使用

○10年先を見据えたICT環境に対応するため、従来のメディアコーナーの改修を行い、ネットワーク再構築委員会を立ち上げた。

○汎用的な資質・能力を測定する調査問題を作成し、児童の思考力について経年変化で分析し、授業改善に生かす研究をしている。

(3) 地域の学校教育へ協力する性格

県や市町村教育委員会等と緊密な連携のもとに、地域学校の研究や現職教育に協力する。そのため県下の小学校や教科研究団体の招請に応じている。また、研究主題にもとづいて進められた研究の業績や結果を発表、討議する研究協議会を定期的開催し、研究実践の交流を図っている。

○昨年度10月13日（火）・14日（水）に第83回小学校教育研究協議会を開催した。参観者（招待者・保護者含む）は1722名であった。昨年度より、469名増やすことができた。

○昨年度の特徴として、研究協議会に埼玉県教育委員会の課長級以上の方に多くの参加をいただくことができた。市町村支援部長、市町村支援部副部長、義務教育指導課長（2日連続）、保健体育課長、家庭地域連携課長、教育政策課長などである。

○平成27年10月26日の日本教育新聞に、本校の研究の様子と研究協議会の様子が掲載された。掲載されたことにより、神戸大学附属小学校から視察の問い合わせがあった。

附属学校の存在意義、貴校の存在意義について

これからの教育は、チーム学校を中核として、教員の資質向上と地域社会との連携を強化していく必要がある。昨今、様々な教育課題が山積する教育現場でも、チーム学校とはどのようにあるべきかを十分に共通理解し、教育活動を充実していかなければならない。そこで、附属学校の存在意義は、次の点にあると考える。

①教育実習学校としての性格

これからの時代を担う子供たちを育てるために、教育者も育てていかなければならない。県内の全ての子供たちが質の高い教育を受けられるように、附属学校では適切に教育学部生を指導してことができる。

- ・指導技術だけでなく、人間性豊かな教員集団
- ・1年間で10週間（4週＋4週＋2週）も実習生を受け入れることによる豊富な経験値
- ・実習最終日には、一人一人の教育学部生に教育者としての意識と技術を持たせるカリキュラム
- ・一つの学級に複数の教育学部生が配属されることで、教育についての議論が活性化
- ・教育学部生が複数の教員や他実習生と協働して実習することで、社会人として必須であるコミュニケーション能力の向上

②研究、実験学校としての性格

これからの社会を生き抜く子供たちを教育していくために必要な教育課程を実践的に研究している。埼玉県では、教員の若年齢化に伴い、教科教育に重点を置かざるを得ない公立学校が多い。附属学校では、教科教育と全教科・領域における共通の学力の向上を図る研究を行っている。10年後に若手教員がミドルリーダーとなるころ、附属学校の研究が公立学校の教育の在り方を示唆するものになると考える。今後、10年先を見据えた先進的な研究を行うことができる。

- ・第83回小学校教育研究協議会 水平思考力の授業（13授業）
垂直思考力の授業（26授業）
- ・思考力の測定する調査問題の実施（本校独自）
- ・汎用的な能力を育てる年間指導計画と評価計画の作成と実施
- ・幼小中の連携を進めることで、児童の教育を充実させるとともに、教員の指導力向上を図る。

③地域の学校教育へ協力する性格

県や市町村教育委員会等と緊密な連携のもとに、地域学校の研究や現職教育に協力する。そのため県下の小学校や教科研究団体の招請に応じている。

- ・機関研修や校内研修の指導者等の出張回数 合計358回
- ・南部教育事務所管内指導主事研修会授業提供（2名）
- ・県立総合教育センターからの初任者研修、10年経験者研修指導者要請（6名）
- ・埼玉県内40市町からの指導者要請